

地域の教育力の向上を目指して

生涯学習課 織姫公民館

桂 喜男 小倉賢介 大川雅代 小泉由美子 柿沼美枝

1、はじめに

足利市には、社会教育法に定められた公民館が17館ある。17の公民館では、公民館のおかれた地域の実情を踏まえながら、「地域の教育力の向上」を目指して事業に取り組んでいる。

昭和59年には、17の公民館の学級・講座の担当で公民館職員研究部会を立ち上げた。公民館事業に関する専門的な知識・技能を身につけ、公民館職員としての資質の向上を図るためである。

公民館職員研究部会では、平成19年度から生涯学習課の方針を受け17館が足並みをそろえて事業展開を進めるための一つの方法として、公民館職員研究部会（以下、公職研）独自の研究テーマを設けることにした。

平成20年度の研究テーマは以下の3つである。

(1) 企画・運営委員を育てるためにはどうすればいいか

各公民館で実施している「学級・講座」に、企画段階から市民が参加して運営にも携わる、そのためにはどうすればよいかの研究

(2) 住民に親しまれる公民館だよりを目指して

17館の公民館が「公民館だより」を出している。どうしたらより地域住民に読まれる公民館だよりになるかの研究

(3) 学社連携の深まりを考える

公民館から学校に働きかけ、学校のニーズに耳を傾けながら学社連携を進めるためにはどうしたらよいかの研究

2、織姫公民館の実践

織姫公民館には、学級・講座担当者が3人配置されている。織姫公民館が足利市において中央公民館的な役割を担わされている理由による。

3人の学級・講座担当者は、館長の指導と織姫公民館に勤務する全職員の協力を得ながら公職研の3つの研究テーマについて取り組んでいる。平成19年度と20年度の取組結果を次にまとめてみた。

(1) 企画・運営委員を育てるためにはどうしたらよいか

平成20年度、織姫公民館では18の学級・講座を実施した。

- ・家庭教育学級2（地域の小中学校PTAと連携し「親おやゼミナール」として実施）
- ・乳幼児学級1（パパママ育児セミナー）
- ・青年学級1（織姫彦星学校）
- ・少年教室1（子ども探検教室）
- ・女性学級3（西女性学級 中央女性学級 あおば女性学級）
- ・高齢者学級1（花水木学園）

- ・成人大学講座2（織姫大学 地球市民講座）
- ・各種講座4（和風アート 枕草子を読む 簡単筋トレ 外国人のための日本語講座）
- ・少年各種講座1（木彫り工作教室）
- ・英会話講座1（織姫キッズ英会話）
- ・IT・パソコン講座1（パソコンで年賀状を作っちゃおう）

この18の学級・講座すべてを企画・運営委員方式で実施することはむずかしい。そこで可能なところから取り組むこととして、平成19年度は乳幼児学級と青年学級の2学級を先導的な研究として取り組んでみた。そして、平成20年度もこの2学級について継続研究をすることとした。

研究をスタートするに当たって織姫公民館の担当者間で、学級・講座の企画・運営に受講者や地域の人々が企画・運営に携わる意味について話し合いを何回か持った。

担当者間での確認した共通理解は次のようなものであった。

教育は人づくりである。公民館はその置かれている地域に教育尊重の雰囲気を作り出すことを目的としている。教育尊重の雰囲気とは教育を大切と考える地域の人づくりをいかに増やしていくかにかかっている。

地域の人々が公民館の学級・講座の企画・運営に参加してもらうことによって、そこで身につけたスキルや成就感・達成感を地域の活動の中で活かすことによってより地域づくりに資するようになってもらう。

このように共通理解をしながら研究のスタートをしたが、それにしても不安は尽きなかった。

たとえば、企画・運営委員って何をどこまでやってもらえばいいのか。企画・運営委員を募集しても果たして応募者があるか。企画・運営委員の人たちへの予算的措置は必要なのか。企画・運営委員に任せるとき、行政としての行政課題を企画の中に位置づけることができるのか。趣味的な楽しみを主にするような企画だけになりはしないか。運営を任せるにしても何をどこまで任せられるのか。担当者が全部シナリオを書いてその通りにやってもらうようなことになり、かえって担当者の負担が増えるようなことにならないか。

なにより、担当者が企画・運営委員の指導などできるものなのか。自分のことだけで精一杯の毎日の業務の中で企画・運営委員を育てるなどというだけのことができるものかどうか。

また、地域の人に企画・運営の全部を任せられるようになるならば公民館や学級・講座担当者そのものの存在意義がなくなってしまうのではないか。

このような様々な思いを学級・講座担当者は胸の奥に潜めながらもそれぞれの立場で取り組んだ。以下がその経過と現状である。

1) 乳幼児学級での実践

織姫公民館の乳幼児学級は「パバママ育児セミナー」という。例年、9月から12月にかけて11回シリーズで行っている。

18年度までは一人の担当者が企画・運営してきたが、19年度から、企画・運営委員方式を導入しながら取り組んでみることにした。

- ① 平成19年度の企画・運営委員方式導入の取り組み手順

ア、5月 市広報紙「あしかがみ」に企画・運営委員募集の呼びかけをした

応募者は2名あった。20代1名 30代1名

2名は今までパパママ育児セミナーに受講者として参加していて、講座内容に興味をもっていた。そのため、企画・運営委員募集の記事を見て興味を持って参加した。

他に1名も企画・運営委員になってくれたが、この人はあしかがみの記事を受講生募集の記事と勘違いして申し込んできた。そこで担当者が企画・運営委員をやってみないかと呼びかけることによって委員となってくれた。

イ、5月 第1回打ち合わせ会議（第一回は企画・運営委員会の名称は使わなかった）

内容；・自己紹介

- ・企画・運営委員についての意義と趣旨を館長と担当者から説明
- ・受講者時代にこういうことをやってみたかったという希望を出しあった。
- ・講師についても自分が話を聞いてみたいと思う講師について話し合った
- ・その上で大まかな計画を作る
- ・次回までに自分なりの考えや案のまとめをしてくる約束をして散会。

ウ、6月 第2回企画・運営委員会（第2回から企画・運営委員会という名称を使う）

内容；・持ち寄った意見についての意見交換

- ・講座内容・講師・日程の決定
- ・役割分担ついでの話し合い。企画・運営委員は何をどこまでやるか。
- ・講師交渉については、企画委員が交渉するのは自信がないということで、公民館職員がすることになった。ただし講師との打ち合わせには企画・運営委員も同行する。
- ・担当講座の司会・進行の分担（進行手順の原稿は担当者が作って渡す）

決定した講座 受講者22名（募集20名）

- 1 子育て みんなで考えてみよう
- 2 こころとからだ バランス健康法
- 3 親子バス旅行 ぐんま子どもの国
- 4 子育てと自分育て
- 5 腕に自信あり 愛情たっぷり自慢料理
- 6 お医者さんに聞きたいこと
- 7 パパもママもリフレッシュ ヨガピラティス
- 8 親子演劇会 ねずみのすもう
- 9 年末近し！デジカメ de 年賀状
- 10 楽しい子育て
- 11 歌って踊ってリトミック

エ、12月 第3回企画・運営委員会（反省会）

・はじめは不安もあったけれど終わってほっとした。楽しかった思いが残る。

- ・講座の企画・運営にたずさわったことで受講者の反応が気になった。
- ・当日の司会進行に携わったことは得がたい経験であった。
- ・企画・運営委員はこの講座に受講者として参加したことのある人がなった方が企画内容に積極的に参加できるように思った。
- ・講師交渉はやってみたい気もするが講師に信用してもらえるかという不安がある。
- ・企画・運営委員として一緒に活動した人とはその後の子育てのことで情報交換ができてその意味でもやってよかったと思う。

オ、担当者としての感想

- ・話し合いの中で母親同士が子育てについて話し合う仲間作りを求めている姿が伝わってきた。
- ・そのうえで、受講生同士が交流できて子育てに役立つ内容の企画を求めていることが随所に感じられた。
- ・話し合いを重ねる中で、担当者では思いつかないような発想からの企画が生まれた。
- ・企画委員の口コミから参加者が例年になくふえた。受講希望者がふえすぎて受講を断るのに苦労したのは悔しい。
- ・次年度もぜひ企画・運営方式を取り組んでみたいと強く思った。

② 平成20年度の取り組みの手順

ア、5月 市広報紙「あしかがみ」で企画・運営委員の募集

応募者；3名 20代1名 30代2名 委員は前年度と全員入れ替わった。

応募動機；1名 自分の育児の思い出にしたいことから。

1名 助産師。助産師として出産前の母親たちにはケアができるが出産後は難しい。母親と子どもの様子を知ることはできないのだから。子どもが産まれたあとの子育てを含むお母さんたちの生き方にもかかわりをもちたいというかねてからの思いがあってやってみようと思った。

1名 友達に誘われて。

イ、5月 第1回企画・運営委員会

内容；・企画・運営委員の趣旨の説明

- ・平成19年度の運営委員の仕事と取り組みの様子についての説明
- ・内容、期日、講師など企画の大体について案として決めた

ウ、6月 第2回企画・運営委員会

内容；・第1回で決めた内容案の細部を決定

- ・担当者よりの提案

今回は、企画・運営委員が一人1講座もつのはどうかと提案してみた。

仕事をもちながら子育てを両立させている経験、身近に相談者がいなくて子育てで困ったときどうするかというようなこと、今、子育てに苦労している母親だからこそ話せる内容があるのではないかと話してみた。委員たちは真剣に

考えてくれることを約束してくれた。

エ、6月 第3回企画・運営委員会

内容；・企画内容について確定 企画委員の役割分担の決定 担当講座の分担

・講師交渉

今回の企画委員は講師交渉をやってみたいという希望。そこで講師の選定について全委員で検討し講師交渉の担当者役も決定した。

・担当委員から公民館の電話で講師に連絡する。

講師のお願い 打ち合わせ日時の交渉など

・講師との打ち合わせ

委員と担当者が同行する。細部についての打ち合わせをする。

謝礼関係については担当者が説明する。

・企画委員が1講座担当することについては3人から快諾の返事

決定した講座 受講者24名（募集20名）

- 1 子育て井戸端会議
- 2 愛とエイヨウをこめて・・ 子どもがヨロコブお弁当をつくります
- 3 おクチ探検！～むし歯をやっつけろ～ （講師；企画・運営委員）
- 4 子どもを伸ばす“しつけ”のヒント
- 5 助産師さんに聞きたいこと （講師；企画・運営委員）
- 6 親子演劇会 みにくいアヒルの子
- 7 パパママ エクササイズ ～バランスボール～
- 8 必見！マネー・セミナー
- 9 パソコン de 年賀状をつくろう
- 10 自分へのX'mas プレゼント （講師；企画・運営委員）
- 11 プリザーブドフラワーのアレンジメントをします
- 12 寒さなんて吹き飛ばせ！～リトミック～

オ、12月 第4回企画・運営委員会（反省会）

・スタートした時は本当にできるか不安だったけど、今は楽しくできた充実感でいっぱいだ。

・子供の具合が悪く全部の講座に参加できなかった悔いが残るが、来年もまたぜひやりたいと思う。

・企画・運営委員としての役不足はいつも感じてはいたがこの企画に参加してみて同年代の子どもをもつ親同士の交流の場をつくる必要を感じることができてとても意義のある機会だった。

・今回は企画・運営委員が講師として一講座ずつ担当したが、自分だけの経験を他の人に納得できるように話す機会を与えられたことで、理論的な裏づけも勉強しなおしたし、納得できるまで事前の実験的準備も繰り返した。人に教えることは自分に教えること、

それを改めて実感した。

- ・企画・運営という得がたい経験を与えられたことに感謝するが、それも、陰になって企画・運営委員が動きやすいように問題点を把握して整理し条件を整えてくださった担当者のOさんには本当に感謝している。

③ 担当者の感想

- ・お母さん方が求めている講座の内容はいつの年もあまり変わらないものだということが分かってきた。
- ・企画・運営委員が変わると、公民館に足を向けたことがないような人たちが参加してくれるようになるという発見があった。
- ・全講座終了後、企画・運営委員について次年度のアンケートを受講者にとったところ、やってみたいという希望者が4名いた。公民館主事の間には企画・運営委員をやりたがるような人はいないのではないかとこの先入観があるように感じるが事実は少し違うという印象を受けた。
- ・企画・運営委員が毎年入れ替わる雰囲気が出てきたことによってマンネリ化やその他の人間関係にまつわる種々の問題に悩まなくてもいい方向性をもった企画・運営委員会ができそうだ。
- ・子育てにかかわる若いお母さんたちは真面目で意欲が十分ある。やってみたい、挑戦してみたいという気持ちを十分持っていると感じた。その意欲に方向性と具体的な道筋をつけていくことが今後の公民館の人づくりの方向を示唆しているように感じた。

2) 青年学級での実践

織姫公民館の青年学級は通称「オリヒコ」と呼ばれている。オリヒコは、今年は20名籍を置いている。仕事の都合もあって常時活動に参加しているオリヒコは17名前後。活動時間帯は金曜日の夜7時から9時までを原則としている。

社会に対して自分たちから積極的にかわりながら社会に役立つ人材になるために仲間同士で協力しながら様々な活動に取り組んでいる。

この青年学級では公職研が研究テーマとして取り上げる以前から、自分たちの社会参加は自分たちで企画、計画して活動することが必要ではないかとの考えを持っていた。ために、平成18年度にはオリヒコ企画運営委員会を立ち上げて活動しようとした。しかし、結果は思うような計画は実現できなかった。

平成19年度、公職研の研究テーマが「企画・運営委員」の研究となったのを機会に再度の挑戦となった。

① 企画・運営委員の呼びかけ

担当者より今まで意欲的に活動していたように感じられた6名のメンバーに企画・運営委員をやってみないかと呼びかけをした。結果は3名がなってもよいとの返事。

1名(女性、20代)は、自分たちで企画内容に取り組んでみたいという意欲をかねてから持っていたためにやってみなかったとの返事。

他の2名（男女各1名、ともに20代）は、最初の1名に誘われる形で参加することになった。

ア、5月 第1回企画・運営委員会

内容；・企画・運営委員方式の趣旨について説明

- ・今年度の青年学級の取り組み内容についての自由な話し合い。
- ・話し合いの中で、クッキング&テーブルマナー講座に決定

イ、7月 第2回企画・運営委員会

- ・参加者5名。第1回参加者が他のメンバーに声をかけることによって2名（男女各1名）増えた。

内容；・料理講座の細部、メニュー、講師について決定。

決定した講座

受講者20名（女性15名、男性5名） （募集25名）

- 1 マーボー豆腐 春雨中華
- 2 かぼちゃのタルト
- 3 ビーフストロガノフ 青菜のカッテージチーズ和え
- 4 かじきのまぐろのおろしだれ ひじきに煮物
- 5 テーブルマナー講座

ウ、9月 第3回企画・運営委員会（反省会）

テーブルマナーの講座が終わったその場で反省会を持った。

- ・自分たちの企画が実現でき、参加者も思いのほか多かったのでうれしかった。
- ・料理がおいしいものばかりだった。作り方が簡単だということがわかったので自分でもつくってみようという声がかえってきたので企画する側の意欲が湧いた。
- ・つくっているとき受講生とのコミュニケーションがとってもよく意義があったと思う。
- ・初めて参加した人もいて最初は緊張していたようだけど、企画委員がそれとなく話しかけたりしながら気を遣うことで仲良くなれた。初めて参加した本人も参加してよかったといってくれていた。
- ・自分にとってもはじめて作った料理ばかりだったので新鮮だった。ぜひまた企画委員としても参加してみたい。

エ、11月 第4回企画・運営委員会

内容；青年学級と織姫公民館で学ぶ「外国人のための日本語講座」受講生との交流会

青年学級のメンバーが織姫公民館に出入りするうち、公民館に日本語講座があり、世界の様々な国の人々が足利で日本語を学んでいることを知った。日本語を学ぶ外国の人と話してみたいとの声の一部のメンバーから上がったのを機会として、青年学級と日本語講座の外国人との交流について担当者から提案してみた。

賛成の声をを受けて企画委員とともに計画を次のように立てた。

交流会 日光東照宮・中禅寺湖へのバス旅行

期 日；12月14日（日）

目的地；日光東照宮・中禅寺湖

費 用；3500円

参加者；34名

青年学級 10名

日本語講座受講生 21名

国籍 モロッコ 2名

バングラデシュ 7名

スリランカ 3名

ペルー 6名

中国 3名

（事務局 3名）



行 程；織姫公民館（8；00）⇒佐野・藤岡 I C⇒日光 I C⇒中禅寺湖・華厳の滝⇒昼食⇒日光東照宮⇒日光 I C⇒佐野・藤岡 I C⇒織姫公民館（17；10到着）

オ、この交流会についての企画・運営委員の反省会はもてなかったが、参加者の意見をまとめてみた。

- ・（青年学級）織姫公民館にこんなにたくさんの外国の人たちが出入りしているなんてまったく知らなかった。
- ・（青年学級）世界のどこにあるのかまったく分からないような国の人と話ができることが不思議に思う。
- ・（青年学級）こういう交流がもっとあっていい。できれば、来年の青年学級の講座の中に今日のような交流ができるような企画を考えてみたいと思う。
- ・（バングラデシュ）こんなにたくさんの日本人と特別な用事がなくて話しができたことははじめての経験。いつも限られた日本人と用事だけの会話だったから貴重な機会だったと思う。
- ・（スリランカ）雪を初めてみた。写真でしか見たことのない雪におおわれた湖に感動した。
- ・（モロッコ）日本の歴史にちょっとふれた。よく分からなかったけどもう一度日光に行ってみたいと思う。
- ・（中国）日光東照宮で日本と中国とのつながりの様々が目の前にあるのを見て、中国と日本の歴史の関係の深さに感動した。
- ・（青年学級）外国の人の生活や風習（たとえば食べ物や飲み物、神仏への向き合い方）がそれぞれ違うということが分かって、自分が利口になったような気がする。

② 担当者の感想

- ・企画・運営委員になってみないかとの担当者からの呼びかけに応えてくれて、企画・運営委員会にも積極的に参加してくれた青年学級のメンバーには感謝の気持ちでいっぱいだ。

- ・また、クッキング&テーブルマナー講座という比較的興味を持って参加できる内容であったにしても、20名近くが常に参加してくれたのには感激した。
- ・日本語講座受講生との交流にも10名が参加し、自分たちの方から積極的に話しかけたりしながら交流を図っていた。この青年たちとはもっと何かできるのではないかと漠然とながら思った。
- ・今年は、初めての担当であったこともあり夢中で1年を過ごしてきたが、次年度は、担当としての企画を練り上げたうえで、企画・運営委員とともに月1回程度の割合で年間を通した学級運営ができればと考えている。
- ・内容としてはスポーツや趣味的な講座も交えながら、社会貢献を目指したボランティア的な企画も考えてみたいと思っている。

(2) 住民に親しまれる公民館だよりを目指して

織姫公民館だよりは、平成21年1月号で441号になる。37年にわたって出し続けている。残念ながら昔の公民館だよりは残っていない。しかし、関係する人々の記憶によると、現在の「織姫公民館だより」のスタイルはそのころから変わっていないようだ。

1面の【織姫公民館だより】とイラストで書かれた文字、郵便スタンプの模様をあしらった中に書かれた「回覧」の文字とそのときどきの季節を表すイラストと号数の数字。まぎれもなく創刊当時の織姫公民館だよりのスタイルだ。

発行は月1回。発行部数は1500部。残念ながら今も「回覧」である。



織姫公民館の裏に足利市指定重要文化財「物外軒茶室」があるのをご存知ですか。4・5月と10・11月の土・日・祝日に無料公開されています。公開中は市内はもちろん市外からの多くの参観者で賑わっています。また物外軒茶室を配する庭園の景観が訪れる人に感銘を与えています。物外軒庭園は、明治時代に足利市街地の旧家・柳田家の庭園として作庭されたもので、茶室も明治38年にこの地に移されたものです。約1358平方メートルの庭園には池や薬山、飛び石が調和よく配されています。平成18年に文化財庭園保存技術者協会の実地研修として庭園の整備（木々の伐採や枝下ろしなど）がなされ、美しい景観に生まれ変わりました。本年3月には、文化庁から国の登録記念物（名勝地）に指定されました。足利市内では、月谷町の笹華園に続いて2番目。春季の公開は終わりましたが、秋季はモミジなどの紅葉が見られますので、足を運んでみてはいかがでしょうか。

(織姫公民館長)



発行:織姫公民館

〒326-0814

足利市通6丁目3165-1

電話: 21-6144

メールアドレス:

orhm-k@city.ashikaga.tochigi.jp

【2008年7月】

1) 編集方針

- ① 市民に特に必要な「市からのお知らせ」を載せる。
- ② 織姫公民館で実施する学級・講座のニュースは必ず載せる。
- ③ 織姫公民館以外の公民館で行う学級・講座のニュースは公民館同士で相談しながら載せる。
- ④ 地域のニュースや学校からのお知らせを載せる。

2) 「住民に親しまれる公民館だより」づくりのために取り組んでいること

① 編集会議

ア、公民館の職員全員（6名）で行う。

館長 学級担当3名 技能員 窓口担当職員

イ、編集会議は3回行う。

1回目 前号の反省、公民館に出入りする人や地域の人が公民館だよりについて話していた情報を出し合って共有する。

編集方針の決定 紙面の割付と担当分担の決定

2回目 担当より出された案の検討（職員はダメだし会議とよんでいる）

3回目 再提案された案の検討・承認

ウ、地域情報・学校関係のニュースを掲載する努力をする。

学 校；・毎月発行される公民館だよりを持参して学校関係者と顔を合わせ、ニュースなどを得る機会とする。

地域情報；・学級・講座の企画・運営委員との会合の中にざっくばらんな話ができる時間を作る。

・学級・講座の役員との連絡は顔を合わせて話し合う機会を作る。

・地域の関係諸団体等役員との日常的な会話を意図して作る。

⑤ 公民館だよりについてのアンケート調査の実施

毎年、必ず学級・講座の一つを選んで、織姫公民館だよりについてのアンケート調査を実施して実態把握をしている。

ア、平成20年度 あおば女性学級で実施 実施時期 平成21年1月

アンケート内容と結果 回答24名

1 織姫公民館便りについて必ず目を通すニュースに○をつけてください。

・学級・講座の情報	20名	(83%)
・公民館長の書いているコラム	14名	(58%)
・よもやま話	22名	(92%)
・サークルの紹介・募集	16名	(67%)
・消費者センター・ニュース	14名	(58%)
・乳幼児子育てひろば	0名	(0%)
・貸し出し本(興国文庫)ニュース	6名	(25%)
・織姫ミニ・シアター	12名	(50%)
・その他でご意見がありましたら書いてください。		

- ・回覧板が回ってくるのが遅すぎる
- ・回覧でなくて個別配布にできないか
- 2 地域で取り上げてほしいニュースはありますか。
 - ・ボランティア活動の実態と事例
- 3 公民館だよりに記事を書いてみたいですか？
 - はい 0 いいえ 16名 答えなし 8名
- 4 その他、公民館だよりに意見、要望等がありますか？
 - ・学校の紹介を載せてほしい
 - ・月1回料理サークルに参加していますが、織姫公民館は気軽に使用できてよいと思う。

イ、アンケートから読み取れること

- ・アンケートのたびに感ずることであるが、ほとんどの方が一通りは目を通してあげているということが分かった。
- ・ただ、回覧であるためにタイトルだけに目を通して次の家に回す忙しさがある。したがって、読むのは主婦だけという家庭が多く、他の家族は公民館だよりがあるのさえ知らない（ある方のお話から）ようだ。
- ・学級・講座のニュースについてはかなり細部にわたって目を通して印象。出席する場合は、知り合い同士で連絡を取り合っていることがうかがえた。
- ・乳幼児子育てひろばの記事は読んでいない人がいないと回答したが、応えてくれた女性学級のメンバーが比較的高齢であることが要因と考えていいだろう。
- ・学級生の多くは織姫公民館のサークル関係の情報については興味を持って接している印象を受ける。
- ・「館長の書くコラム」や「よもやま話」が比較的に読まれているのは、公民館だよりが足利市や公民館の情報を知らせるものだけでなく、この二つの読み物を読むことによって、今の世相に気軽にふれることができる側面をもっているからだろう。

ウ、「住民に親しまれる公民館だより」についてこれからも努力しなければならないこと

- ①「編集を全職員で行っている今の体制は重要である。継続すべきである。編集会議に参加し何度も何度も組みなおしながら作り上げる作業は、織姫公民館に勤務する職員の資質を向上させる事業となっている。
- ②「その上で、織姫公民館だよりが単なる情報紙から、織姫公民館地域に「文化」を発信する中心にさせていく意欲を全職員がもつ。
- ③ 公職研の研究テーマ「住民に親しまれる」公民館だより。「親しまれる」ために、どこから切り込んだらよいただろう。大きな課題である。地域情報、学校情報を載せてほしいの要望にどう応えていくか。
- ④ 社会教育法に新たに位置づけられた「公民館の運営状況に関する評価・改善及び関係者への情報提供」。公民館としての評価・改善状況の情報提供をどうするか。公民館にとって公民館だよりの持つ意味は今まで以上に大きな意味をもつ。大きな課題である。

(3) 学社連携の深まりを考える

1) 家庭教育学級の実践

織姫公民館の家庭教育学級は、地域の小中学校、小中学校PTAと連携しながら取り組んでいる。家庭教育学級の受講対象者は、小中学校に子どもを通わせている保護者が主となることが多い。ところが、保護者の立場の人々は昼間には仕事を持っていたり、夜間であっても子どもの世話や塾の送り迎え、時にはお年寄りの世話などもあって家庭を空けることは難しい事情がある。

そこで、織姫公民館では地域の小中学校、小中学校PTAが、家庭教育についてそのときどきで必要と考えて実施しようとしている研修に相乗りさせてもらうような形で講座の組み立てを行ってきた。

① 実施に至るまでの手順

ア、前年度のうちに担当地域の4小中学校を訪問し、次年度の家庭教育学級実施に際しての公民館とのタイアップについて協力依頼をする。その際、公民館としてのこの事業についての基本姿勢も説明してくる。

- ・ 名称 「親おやゼミナール」としていること
- ・ 予算 講師謝金等の予算的措置は原則として公民館でもつ
- ・ 内容・時期 全面的に学校の要望を優先して計画する
- ・ 準備 学校と公民館担当者が連絡を取りながら進める
- ・ 開催の案内 織姫公民館地域の4小中学校の職員とPTA全部に案内を配布し、地域全体で家庭の教育力を盛り上げていくきっかけにしたい。

イ、5月 学社連携会議の開催

- ・ 4小中学校の担当者と公民館での連携会議を開催し、前年度の反省、今年度の要望、公民館全体の事業についての意見などについて話し合いを持つ。
- ・ 「親おやゼミナール」については、学校訪問時に説明した内容を再確認するために再度、出席した担当者にもお願いをする。

② 平成20年度の取り組み

平成20年度は、地域の小中学校2校と連携して実施できた。

ア、けやき小学校との連携

日時；平成20年12月1日（月）午後3：00～4：30

内容；講演会 講師 宇都宮大学教授 松本 敏 先生

演題 とちぎの子どもの「確かな学力」を育むために
～学力を支えるための家庭生活の過ごし方～

参加者；50名 けやき小保護者、職員、あおば小、第二中、職員

参加者の声

- ・ ご自分が今まで教育界の中で経験された豊富な実例をふまえてお話くださったので非常に分かりやすく参考になった。
- ・ 全国的な学力調査をもとにしたデータなど、なかなかふれることもなかったがこの親おやゼミナールに出て知ることができた。それだけでも勉強になった。

- ・家庭での子どもへの接し方、子どもにやる気を起こさせる言葉かけ、眼のかけ方などなど、親のあり方を考えさせられた1時間半だった。
- ・子どもの学力は、親の力であり、家庭の教育力であることは分かってはいても、改めて大学の先生から目の前でお話されて、家に帰った今日から実践してみようという気になった。
- ・日々、子どもたちに接している教師の立場としても、専門的研究家の大学教授のお話はなかなか聞けない。勉強になった。
- ・教師として、保護者の家庭での過ごし方や、親のあり方について思い切ったことはいいにくいこともある。それを大学教授としての立場で明確にお話してもらうことは学校としても意義のあることであった。

イ、第二中学校との連携

日 時；平成20年5月20日（火）午後3時40分～5時30分

内 容；講義と実演

講師 NPO法人青少年メディア研究協会啓発事業部部長 下田 太一 先生

演題 携帯やネットの危険性について

参加者；67名 二中保護者、職員、
市内小中学校児童生徒指導担当職員、
安足教育事務所職員、
足利市教育委員会学校教育課職員、生涯学習課職員

注；今回実施した「携帯やネットの危険性」については、平成19年度に第一中学校を会場として「親おやゼミナール」で実施したものである。

平成19年度に第一中学校で実施した時の講師は下田真理子先生。

下田真理子先生は、ご自分の子どもを育てる経験の中で、子どもたちが携帯とインターネットを利用する上での危険性に気づき、何とかしなければならぬという思いから夫（群馬大学社会情報学部大学院教授）とともにホームページ「ねちずん村」を立ち上げた。

その上で、多くの賛同者の協力とともに、各地で携帯電話やインターネットの有用性の陰に隠れた危険性や有害性について講演会を持ち、保護者や生徒たちの啓発に取り組んできた。

第一中学校においては、携帯電話を用いて簡単に有害な情報を手に入れることができる様子、たとえば薬物をすぐに手に入れることができる、性情報にもアクセスできて出会い系サイトが日常的に利用されているなどのことを携帯電話を使用して目の前で実際に見せてくれた。

また、インターネット上の書き込みが子どもたちの間では生活の一部になりかけている、「プログ」「プロフ」など、個人情報にあふれた書き込み用のページがあり、お互いが顔も素性も知らないまま、架空の人物に成りすまして情報のやり取りをする。

学校裏サイトというものがありそこでは誰が書いたか分からないままに個人への誹謗中傷が野放しの有様。書き込まれた悪口によって自殺にまで追い込まれた生徒がいる。

そして、一番の問題点は携帯を子どもにねだられるままに買い与えている親が、危険性や問題点、買い与えた携帯を子どもがどのように使っているか指導もチェックもまったくできないこと。

参加者は保護者と職員の36人と少数であったが下田鞠子先生のお話で受けた衝撃は大きかった。

平成20年度の第二中学校で行われた「親おやゼミナール・携帯やネットの危険性」第2弾は、一中でのこの取り組みを全市的なものにして行こうという市内校長会の意思もあったと聞いている。

参加者の声

- ・日本の子どもに与える情報をどのようにしたらよいか考えさせられた。
- ・「栃木のこどもをみんなで育てよう」という取り組みをしている今、大人全員の責任としての意識を持つことが今こそ必要と思った。
- ・情報社会であるからこそ、情報を取捨選択できる能力を身につけさせる「情報教育」がまず大人に必要と痛感した。

③ 担当者の感想

- ・児童・生徒を取り巻く様々な現代的な課題を社会教育がもっているネットワークを活用しながらともに子どもを育てていく事業が「親おやゼミナール」であることを学校に理解してほしい願いが徐々に伝わってきていると思う。
- ・親おやゼミナールで取り上げた「携帯やネットの危険性」は、すぐに全ての保護者と子どもたちに知らせていかなければならないことである。子どもたちに携帯電話を持たせることについて保護者、関係機関、事業者などの間に具体的な議論の動きが広がり始めていることはうれしいことである。
- ・公民館と学校は今以上に密な関係を作らなければならない。学校と公民館が連携して事業を持つ場合、どちらが主でどちらが従というような議論がささやかれることがある。意味のない議論だと思う。生徒がよくなる、そのために何ができるかの原点を忘れてはならない。
- ・現在行っている公民館単位での「学者連携会議」はお互いの情報をもっとざっくばらんに話し合うための会議にしなければならないだろう。そして、できれば年2回の開催が望ましいと思う。

2) 西女性学級のパソコン教室を第一中学校で開催

西女性学級は西校地区在住の女性によって構成されている。会員は70名。毎年9回の講座を持っている。平成20年の講座にはIT講座を位置づけた。

内容は、パソコンで自分の名刺作り。

キャッチフレーズ。一中の生徒に教わって「オリジナルの名刺を作っちゃおう！」

① 講座開催までの手順

ア、平成20年3月 担当者より一中教頭先生を通して女性学級のパソコン教室を一中
会場で実施していただけるかの打診

イ、4月、教頭先生より了承の返事あり。

ウ、5月、教頭先生と日程調整と細部の打ち合わせ

エ、8月、館長と担当者で会場見学、最終打ち合わせ

女性学級のメンバーはパソコンを触ったこともない人がほとんどである。したがって、パソコンを正規の授業として学習している生徒が女性学級一名に対して1対1で指導してもらうことを依頼。

② 講座当日の様子

ア、指導者（技術科の教諭）から
パソコンと大体の扱い方について
全体説明

イ、受講者の名刺作り

・生徒一人が受講生一人ひとりに
付きっきりでキーボード、マウス、
ひらがなの入力、変換の仕方など
を教える

・出来上がった名刺は、その場で
プリントアウトする

・受講時間は2時間。受講生には
時間が足りなかったようだ。（学校の教育課程上の時間の位置づけは総合的な学習）



③ 受講者の感想

ア 難しかったけどいねいに教えていただきました。楽しかったです。ありがとうございました。

イ （中略）自分でできる分野が広がりました。人生長生きするものですね。これから
もいろいろなことにチャレンジしていきたいと思います。

ウ はじめてなのでとても難しかったです。

エ はじめてなのにとても親切に教えていただき素敵な名刺ができました。

オ パソコンを使用したのははじめてでしたが、とても楽しくできました。生徒さんに
接することもできて楽しいひとりが過ぎました。

④ 先生役の生徒の声

ア クリックしたり、ドラックしたり、キーボードを押したりするのもすごい時間がか
かって大変だったけれど、西女性学級の人とおしゃべりしながらできて楽しかったで
す。

イ 教えるのは大変だったけれど、出来上がって嬉しそうな顔を見たときはうれし
かった。

ウ 面白かった。人に教えるのは苦手だったけれど何とかがんばれた。

エ できなかったことも少しずつできるようになったり、教える側も楽しいと思ったりお互いに得るものがあったと思います。

オ 最初はうまくできるかどうか分からなかったけど、やっていくうちになれてきて、知り合いだったから話もはずみました。教え方はへただったけど…。へたな説明だったけど、楽しそうにやっているのを見てよかったです。

⑤ 担当者の感想

- ・今回の学社連携を通して、世代間の交流の役割も果たせたと思う。パソコンという年配者には取り付きにくいものを、学校で、しかも孫のような中学生に懇切に教わることによってパソコンに対する年配者のアレルギーも取り除けたのではないかと思う。
- ・地域コミュニティの崩壊が言われている今、このような試みを重ねることによって、地域の中の顔が見える関係作りが再構築されるのではないかと期待を持った。
- ・受講生と生徒の楽しそうな表情が担当者にとっての一番のご褒美であった。
- ・このような機会を積極的に提供してくださった一中の校長先生、教頭先生、汗だくで女

性学級の受講生に説明してくださった技術科の先生、それに、終始、にこやかに教えてくださった生徒の皆さんに心から感謝したい。

毎日新聞に紹介された記事

2) 成人大学受講生と第一中学校、足利短期大学看護科学生との連携

平成20年度の織姫大学は「こんなとき どうする？親おやパワー！」のタイトルで実施された。

子どもとのコミュニケーションのあり方、携帯電話を与えられるままに指導はまったくされていない

お年寄りもWクリック



お年寄りにパソコンを指導する中学生

足利 中学生がパソコン指導

【足利】中学生がお年寄り 姫公民館のIT講座「オリ」にパソコンを指導する織姫シナルの名刺を作っちゃお

うー！が三十日、第一中が開かれた。二年二組の生徒二十二人が、公民館の女性学級受講者十七人に名刺の作り方を優しく指導した。世代間交流と地域内の結び付きの強化を目的に、同館が今回初めて実施した。六十代から七十代の参加者の多くは、パソコン初体験。ダブルクリックや文字の入力に悪戦苦闘しながらも、中学生の丁寧な指導で興味やメッセージなどを添えた立派な名刺を作り上げた。

西宮町の主婦金子政子さん(73)は「孫に教えてもらってみたい。とても楽しく勉強できました」と笑顔。尾沢ひかるさん(78)は「今日のために練習を重ねたけれど、教えるのは難しかった。でもまた挑戦したい」と明るく話した。

い子どもたち、軽度発達障害の子どもの問題が社会問題となりつつある現状への大人たちの無関心、子どもの心の安定を疎外するねたみのメカニズム。そして、10代の「性」の問題。これらを学ぶ講座の中で、特に、性について一中の性教育の取り組みに学びながら受講生に現状を知ってもらおうと考えて企画した。

そのさい、足利短期大学看護科の先生の指導の下で、性の悩みを仲間同士で相談しあいよりよい解決の方向を話し合いの中で決定できる力を育てるピア・カウンセリングの勉強をしている足利短期大学看護科の学生に生徒の中に入って指導してもらいながら、受講生たちに現在の子供たちの性に対する意識のあり方を考えてもらう試みであった。

(当初、この講座は違う形で考えていたが、予定していた講師の都合がつかなくなってしまったためにこの形の講座に変更を余儀なくされた。)

① 講座開催までの手順

ア、平成20年度6月 一中教頭先生に織姫大学の意図と一中の性教育の一環として位置づけてもらえないかと講座開催を依頼。

イ、8月 足利短期大学にピア・カウンセリングの実践を一中で行ってもらう依頼

ウ、9月 足利短期大学の指導教授とピア・カウンセリングのメンバーと公民館担当者との打ち合わせ

エ、10月 一中、足利短期大学、公民館担当者との打ち合わせ (会場：一中)

オ、11月 一中、足利短期大学、公民館担当者との打ち合わせ (会場；足利短期大学)

ピア・カウンセリングのリハーサル見学 一中からの要望についての話し合い

② 講座当日の様子

ア、足利短期大学のピア・カウンセリンググループのメンバー(10名)が一中体育館に集合して会場作り。ピア・カウンセリングについての分かりやすいイラストの入った掲示を張って回る。BGMが流れる。色とりどりの風船で会場の雰囲気を和らげる。

イ、会場中央には大きな字で「HEART 大切なナニか」と書かれた模造紙をはる。

ウ、生徒の入場。6～7名位の同学年男女合同のグループに分けさせる。

エ、プログラム



- ・START 自己紹介
メンバーは自分たちのことを「びあっこ」と紹介
ピア・カウンセリングについての説明
- ・エクササイズ 生徒たちの気持ちをほぐすためにゲームの要素を入れて体を動かさせる
- ・ライフ・ラインについてびあっこが自分の人生設計を話す
- ・グループごとに自分の人生設計を考えさせて紙に書かせ、グ

グループの中で発表させる。びあっこもグループの中に入って話し合いに参加する。

- ・アンケート用紙に感想を記入

オ、ピア・エディケーション終了後、織姫大学の受講生は別室でびあっこ指導教授（足利短期大学教授）より、現在の若者たちの「性」の問題の現状と周囲の大人としての対処の仕方について講義を受けた。

③ 生徒のアンケートに書かれた内容

「今日のピア・エディケーションを行って感じたことを自由に書いてください」

- ・この時間でみんなと仲良くできて、今までの自分を見直すこともできた。（1年）
- ・今まで自分にとっての「大切なナニか」を考えたことなどなかったから、ピア・エディケーション機会にもっといろいろなことを考えてみたいです。（1年）
- ・自分の人生の大事なことを改めて思わせられた。（1年）
- ・自分にとって大切なものは身の回りにあるんだなということに気づかされた。（1年）
- ・自分の周りの人が何を考えて、何を大事にしているのかを知ることができてよかった。（1年）
- ・自分の人生の事を始めて真剣に考えたような気がする。（1年）
- ・自分がいろいろな人とかわりながら生きているということが分かった。（1年）
- ・自分のライフ・ラインをつくってみようと思った。（1年）自分にとっての大切なものを考えると不思議な気持ちになった。自分の小さかったころの大切なものなど忘れていたこともあってそれを思い出すことができたりしてなんだかなつかしかったりうれしかったりした。（1年）
- ・いろんな友達とコミュニケーションができてよかった。（2年）
- ・人には足りないものがある。それを見つけなくてはならないと思った。（2年）
- ・ライフ・ラインを考える中で夢は大きくもたなくっちゃいけないんだと思った（2年）
- ・自分より何年も生きている人の話を聞いてためになった。（2年）
- ・楽しかったけど、自分はまだ人生の半分も生きていないんだなと思った（2年）
- ・体育館の飾りになごまされた。（3年）
- ・優しい気持ちに



なれた。ありがとうございました。(3年)

- ・今までの人生を振り返ることによって、いろいろな人に支えられていることが分かってきた(3年)
- ・リラックスしながら、今まであまり考えたことのないことを考えることができた。(3年)
- ・自分の心の支えとなっているのは、「人」だということが分かった。(3年)
- ・命を大切にしながら、人生を生きて行きたいと思った。(3年)

「疑問に思ったことがあったら書いてください。」

- ・どうしてこういう企画をしようと思ったのか知りたい。

④ 担当者の感想

- ・社会教育の一員としての立場だけで、学校教育の教育内容にまで入っていくことの困難さを痛感した事業だった。
- ・社会教育が学校の教育課程の内容にまでかかわる場合は、学校のニーズを踏まえた上で社会教育が何をどのような形で提供できるか検討するための、学校、公民館双方の担当者が出席して話し合う制度化された場を設置することが不可欠と感じた。
- ・現在、各公民館地区単位で学社連携会議が行われている。そこで話し合われていることはどんなことだろう。社会教育に携わる公民館主事は学校教育の基準となっている学習指導要領について何も知ってはいないのが現状であろう。反面、学校教育に携わる職員は社会教育について何を知っているだろう。ある学校関係職員が言っていた。公民館は市役所の出先機関だと思っていた…。本当の事だろうと思う。学校職員に限らず多くの市民も、時には市役所の職員までもそう思っている現実があるのだから。
- ・できることはなんだろう。できることを一つ一つ積み重ねる。まずは、公民館のことを、担当主事のことを学校に知ってもらおう。

3 おわりに

公職研の平成19年度と平成20年度の研究テーマを受けて織姫公民館で実践してきた経過をまとめてみた。繰り返すが経過である。その時その時の成果も課題もあきらかになったものはあるがそれは経過の中の1部にすぎない。うまくいったことも多い。しかし、ああすればよかった、こうすればもっとうまくいったかもしれないの悔いの思いが先に立つ。悩みながら、苦しみながらの取り組みであった。が、織姫公民館の職員はだれひとりとしてこの研究を進めることを嫌がってはいない。こういった研究のモデルなどはどこにもない。ないからこそ織姫公民館で作り出す。それが織姫公民館職員の合言葉である。

そんなわれわれを、終始、高橋昭館長は見守り続けてくれた。節目、節目には一言二言のアドバイスがあった。その一言と職員を見守るまなざしの暖かさにどんなに支えられたことか。高橋館長の指導と支えがあってわれわれの取り組みはここまで来ることができた。

織姫公民館職員一同、高橋昭館長への深い感謝と尊敬の思いをもって今日までのわれわれの実践をささげたい。

評

公民館事業に関する専門的な知識・技能を身につけ、公民館職員としての資質の向上を図るため、昭和59年、公民館職員研究部会が、市内の17の公民館の学級・講座の担当で組織されました。

平成20年度、公民館職員研究部会では、今年度の研究テーマとして、次の3つを取り上げています。

- (1) 企画・運営委員を育てるためにはどうすればいいか
- (2) 住民に親しまれる公民館だよりを目指して
- (3) 学社連携の深まりを考える

織姫公民館においては、それぞれのテーマについて、館長はじめ職員が一丸となって、悩み苦しみつつも前向きに楽しみながら、真摯に取り組んでこられました。その実践の記録が、今回応募されました研究論文です。

- (1) では、「乳幼児学級での実践」と「青年学級での実践」が紹介されております。
- (2) では、「編集方針」「編集会議」「アンケート調査について」が紹介されております。
- (3) では、「家庭教育学級の実践」「西女性学級の実践」「成人大学の実践」が紹介されております。

論文の特徴としては、それぞれの取り組みについて、その経過が克明に記述されていることがあげられます。そしてなにより重要なことは、参加された方々の生の声と担当者としての感想が述べられていることでもあります。

<担当者の感想>から

○「乳幼児学級での実践」では、

- ・ 話し合いを重ねる中で、担当者が思いつかないような発想からの企画が生まれた。
- ・ 企画委員の口コミから参加者が例年になくふえた。受講希望者がふえすぎて受講を断るのに苦労したのは悔しい。
- ・ 子育てにかかわる若いお母さんたちは真面目で意欲が十分ある。やってみたい挑戦してみたいという気持ちを十分持っていると感じた。その意欲に方向性と具体的な道筋をつけていくことが今後の公民館の人づくりの方向を示唆しているように感じた。

企画・運営委員になって自分のやりたいと思っていたことができたなどの感想もあり、モチベーション（意欲）が高まるなどの、住民参加の意識が醸成できたと捉えております。

本市の大きな特徴である公民館活動において、織姫公民館が先頭を切って、こういった実践の報告をしてくださったことは、大変意義深いものと思われまふ。今後も、地域に根ざした文化活動、学習活動の場として、生涯学習社会を目指した「足利市の教育目標」の具現に向け、ますます発展していくことを期待しまして評といたします。